2007年10月9日（火）～12日（金）
日本経済新聞夕刊

こころの玉手箱

衆院議員
猪口　邦子

1

託された「学問のバトン」

大河小説「チボー家の人々」

議員会館の部屋は大学の研究室をそのまま移してきたようなつくりにした。国際政治の研究書や経済書が並ぶ書棚の一角に、白水社の『チボー家の人々』全五冊がそろっている。

第一巻「灰色のノート」の奥付は一九六七年十月五日の発行。わたしが十五歳のころだ。定価は四百円。

この大河小説が国際政治学を志す原点になった。

損害保険会社に勤めていた父の仕事で十代前半をサンパウロにくらした。アメリカンスクールに通いながら、家では日本語で世界文学を読む日々だった。

帰国後に通った東京の桜蔭高校でも友との文学論にのめり込んだ。「チボー家」を父が買いそろえてくれたのはそのころだ。手元に一年生のときの夏休みの日記がある。海水浴や旅の話などは登場せず、一冊ほとんど「チボー家」の読後感が綴られている。

灰色のノートは十四歳の主人公、チボー家の二男ジャックと級友ダニエルとの交換日記だ。この友情の証しを教師にとがめられた二人はパリからマルセイユへと家出する。厳格なカトリックと敬虔なプロテスタントという両家の確執。優秀な医学生の兄アントワーヌとジャックの葛藤――。

やがて革命運動に傾倒していったジャックは、第一次大戦下のスイス・アルザスで機上から反戦ビラをまくことを試みるが、飛行機は墜落、大死にする。軍医として戦地へ赴いた兄も毒ガス兵器にやられ、自らの死を悟る。著者マルタン・デュ・ガール渾身の反戦小説は、のちにジュネーブ軍縮大使に任じられたわたしの心のよりどころとなった。

文学少女ではあったが作文は自信がなかった。夏休み明けのある日の授業で、国語の赤星秀子先生が「印象深い日記をみなさんに紹介します」と、わたしの日記を名を伏せて朗読された。戦争で夫を亡くし、女子教育に尽くしていた先生は、この一回の授業でわたしに新たな可能性を開いてくれた。作文への苦手意識が薄れていった。先生から「学問のバトン」を渡された気がした。

のちに桜蔭学園の校長を務められた赤星先生。病気で亡くなられたとの報に接したのは二〇〇二年、軍縮大使としてジュネーブへ赴任後しばらくたってからだった。ジャックが平和を希求した国で恩師の葬式に参列することもかなわず、大使が執務する大きな机にこぼれ落ちる涙を抑えられなかった。

この小説が国際政治学を志す原点になった

いのぐち・くにこ　一九五二年千葉県生まれ。七五年上智大外国語学部卒、八二年米エール大博士（政治学）。上智大法学部教授を経て二〇〇二年軍縮会議日本政府代表部大使。〇五年に衆院議員に初当選、小泉内閣の少子化担当相に。

欧州職人の粋 意気に感じ

真鍮製の水差し

2

家庭生活はいたって質素。長年の研究生活のなかで自然にそうなった。

上智大の助教授だった二十年ほど前、『戦争と平和』を書いていたころは夫の孝（中央大教授、元東大教授）とともに、まさに国際政治研究の前線に立っていた。毎朝六時前に起き、七時には大学の研究室に入り執筆に取り掛かった。

晴耕雨読ならぬ「晴耕雨書」。本を書くのに大切なのは集中力だ。そのために社会との不必要な接触は断ち切る。食事の準備のためにスーパーへ買い物に行くのもやめ、食べたい野菜はマンションの小さなベランダで育てた。キュウリ、ナス、パセリなど何でもつくった。温度管理は自然まかせ。水遣りにさえ気を使えばたわわに実る。

真鍮でできた水差しは、そのころデンマークから取り寄せた。カタログを見て注文した記憶がある。注ぎ口が微妙に細くなっていて水が飛び散らない。水が満杯の状態で取っ手を握ると完全なバランス状態。数学的な計算が働いているのだろう。世界一の水差しをつくろうという職人の粋を感じる。二十年間、酷使してもびくともしない。値段は一万円ちょっとかな。数少ない贅沢だった。

20年ほど前にデンマークから取り寄せた

ヨーロッパ職人の伝統芸は何世紀もかけて発達してきた。地道に職を紡いでいくことが文化・文明につながる。その営みに頭の下がる思いだ。研究書の執筆も職人芸にたとえられる。評価してくれる数少ない読者がいるからこそ、その道ひと筋を貫ける。

いま水差しは議員会館に持ってきている。自室に花を絶やさないようにしているからだ。街の花屋で完璧なバラの切り花を買ってくるのでなく、そのときどき家に咲いているフレッシュな花を飾る。パンジー、ヒヤシンス、フウセンカズラ……。早朝ベランダに出て生き生きとした花を摘み、そこから爽やかな英気を仕事に生かす。

ちょっとした美しさを備えたこの小宇宙で、学問や政治と向き合う。研究者時代から変わらず続けているこのスタイルを忘れないようにしたい。

世界の仲間と談論風発

8組のフルコース食器

3

料理にはちょっぴり自信がある。新婚の一時期をすごしたスイスは、フランス料理の腕を磨くのに打って付けだった。在籍していた米エール大からジュネーブ大の国際問題高等研究所に留学し、博士論文の準備をしていたころだ。

当時、夫の孝もジュネーブ大の客員教授だった。前年に慌ただしく結婚し、ともに生活の中心は勉学。彼の地で仲良くくらす幸せをかみしめた。

国境と文化を越えて外交官や研究者が集う街。できるだけ多くの仲間との会話を楽しむようにした。でもそうした場にレストランは不向き。お金もかぎられているし、長い時間、談論風発というわけにもいかない。そこで、わが家で、手づくりのフルコースを振る舞うことを思いついた。

フルセットの食器はデパートで買いそろえた。男女のペアを三組ずつ招くことが多かったので、計八セット。オフホワイトの色調がテーブルクロスに映える。

料理のコツを教えてくれたのも家にやってくる奥様仲間。冷たい前菜、スープ、メーンディッシュ、サラダ、チーズ、デザート、コーヒー。おもてなしに軽く二時間半かかる。オープンの火加減を気にしながら会話に加わる。たとえば日本は世界からどう見られているか。議論し、問い掛け、それに答え、また議論し、結論を出す。おいしいものを食べながらの二時間半がちょうどいい。

帰国後に住んだのは都心から電車で三十分ほどの郊外マンション。さほど広くないリビングダイニングに大きめの丸テーブルを据え付けた。猪口家の学術サロンといったらかっこよすぎるが、ここにも各国の学者らをよく招待した。

東京の私鉄に初めて乗ってやって来たという外交官もいた。米国務省でライス長官のブレーンをしていたスタンフォード大のスティーブン・クラズナー教授も猪口サロンのメンバーだ。夫は政治学者としての国際人脈がぐんぐん広がっていった。

わたしは駆け出しの助教授。肩ひじ張らずに自らの学問と内助の功とを両立させる生活を心がけていた。

お気に入りの食器

丸暗記は最良の英語上達法

ぼろぼろの英単語ノート

4

十代前半をすごしたサンパウロのアメリカンスクールはアジア人禁制だった。そこに通ったのは、父が学校当局に掛け合ってくれたおかげだ。当然、肩に力が入る。「武士の一分」ならぬ「子供の一分」を保たなければならない。英語を死に物狂いで勉強した。

音読、繰り返し、暗記。勉強法はこれに尽きる。単語を覚えるためのノートやカードを何冊もつくり、毎日せっせと読み、書いた。いちど覚えた単語も毎日最初から繰り返す。意味を悟り、綴りはアルファベットをそのまま覚える。アップルは「エイ・ピー・ピー・エル・イー」。この世をあきらめたと思って自ら修練を課した。

使える単語をひとつでも多く増やす。何千も知っていれば、まず本が読める。単語がわかれば文法は後からでも簡単に学べる。次は定型文を丸暗記する。英作文ができるようになる。応用を利かすには頭に収まっている単語を入れ替え、あてはめればいい。

軍縮大使になったときもこのやり方だった。まず条約をほぼ丸暗記する。交渉相手がたとえば「一五条二項は…」などと言いながらファイルを開こうとしたら、すかさず条文を諳んじる。それだけで心理戦で優位に立てた。

いまは議員として海外からお客を迎えることが増えた。それは楽しみだが、英語力が鈍ったと感じることもある。そこで朝の十数分間、自宅へ届くヘラルドトリビューン紙の一面記事の音読をしている。声に出すとわかるけど、日本語と英語では喋るときに使う顔の筋肉が違う。表情や身ぶり手ぶりも異なる。音読は筋力トレーニングでもある。

アメリカンスクールでは英語のシャワーを浴びるような授業の毎日だった。それに立ち向かおうと、自ら編み出した勉強法。いまからでも英語が上手になりたいひとにお勧めだ。論語にも、学びて時にこれを習う、亦た説ばしからずや、とある。二カ月間、ほかのことを全部あきらめて続けてみてください。

この世をあきらめたと思って自ら修練を課した

次週は三菱地所相談役の福沢武氏です。